

英米での「IEEJ アウトルック 2026」を巡る議論

一般財団法人 日本エネルギー経済研究所
専務理事 首席研究員
小山 堅

11 月 12～14 日、ロンドン及びワシントン DC を訪問し、13 日に JETRO ロンドン事務所において、14 日に Center for Strategic and International Studies (CSIS) において、筆者及び弊所の小林良和研究理事の 2 名で、IEEJ アウトルック 2026（以下、本アウトルックと略）に関するプレゼンテーションを行う機会を得た。今回、本アウトルック発表のためのこうした貴重な機会を提供して下さった会議主催者である、JETRO ロンドン事務所及び CSIS に対して、弊所を代表して心からの謝意を表したい。

2 つのプレゼンテーションの会議ともに、多数の参加者があり、本アウトルックに関連して多数の質問・コメントが寄せられ、活発な意見交換を行う有意義な場となった。合わせて、今回の英米訪問の間、それ以外の会議等でも多くの専門家等と本アウトルックや、その他の国際エネルギー問題について、広く意見交換を行うこともできた。以下では、本アウトルックに関する意見交換を中心に、筆者にとって特に印象に残った重要なポイントを所感として整理する。

なお、本アウトルックの概要やポイントそのものについては、小論「国際エネルギー情勢を見る目」（763 号）においてまとめており、またより詳細な内容については、弊所 HP において本アウトルックの資料にアクセス可能となっているため、ここでは本アウトルックの中身には立ち入らない。ご関心の向きは、是非、上記の資料等を参照していただければ幸いである。今回の小論では、あくまで本アウトルックに関する今回の意見交換を通して得た所感に焦点を置くこととする。

第 1 に、本アウトルックでの 2 つの将来シナリオのうちの一つ、レファレンスシナリオの意義について、興味深い議論を行うことができた点を挙げたい。この問題は、折しも 11 月 12 日に IEA がそのフラッグシップ刊行物の最新版、「World Energy Outlook (WEO) 2025」を発表し、その中で Current Policies Scenario (CPS) を「復活」させたことと密接に関係がある。昨年の WEO まで、かつては中心シナリオと位置付けられたこともあった CPS が分析の中から外されることになり、それ以外の、Stated Policies Scenario (STEPS)、Announced Pledge Scenario (APS)、Net Zero Emission by 2050 Scenario (NZE) などの分析が行われてきた。シナリオの名前の通り、現在の確定した政策が続いていくことを主要な前提とする CPS は、本アウトルックにおいて、現在のエネルギー政策・技術の趨勢が持続すると想定するレファレンスシナリオと、シナリオの性格として親和性・共通点を持つものである。だからこそ、今回の意見交換の中で、CPS の復活という文脈を意識し、本アウトルックのレファレンスシナリオ（及び CPS）の意義を問う意見があったのである。

この問いに対して、筆者は以下のような回答を示し、意見交換を行った。本アウトルックのレファレンスシナリオも、IEA の CPS も、現状の趨勢を重視し、それが続いた場合の 2050 年における世界のエネルギーの将来像を描くものである。この将来像において、どのようなタイプのエネルギーが、どれだけの数量利用されることになるのか、そのためにエネルギー供給がどう拡大していく必要があるのか、その時に CO2 排出はどうなるのか、エネルギー安全保障の課題は何になるのか、などの姿を具体的に描くことになる。現在の「延長線上」にある未来像を示すこと、まずはそのこと自体が極めて重要であり、有意義であ

もう一つ、さらに重要なのは、レファレンスシナリオや CPS は、他のシナリオあるいは他の将来像と比較をする場合の重要なベンチマークとしての役割を持つ、ということであろう。本アウトルックの場合は技術進展シナリオとの、IEA の WEO の場合には、STEPS や NZE との比較を通して、エネルギーの未来が如何に変化するのか、どれほど大きな変化を示すのか、その変化のためには何が必要になるのか、を示すことが可能となるのである。個々のシナリオが描く将来像は、それぞれに特徴を持ち、数値で示された具体的なエネルギー需給にも多様な差異がある。こうした差異を理解し、有益な比較をするためにも適切なベンチマークは不可欠である。筆者はその点において、CPS の復活を心から歓迎している旨を意見交換の時に明言することとなった。

第 2 に、国際エネルギー情勢を巡る不確実性が大きく高まり、エネルギーの未来に向けた変革・転換に関する理想と現実のギャップが深まる中で、長期エネルギー見通しの役割は何か、という本質的な問題意識に関わる意見・質問に触れることができたのは筆者にとって改めて大きな刺激となったことを挙げたい。エネルギーの未来はますます Uncertain になり、Unpredictable になっている。例えば、米国のようなエネルギー情勢に大きな影響力を持つ超大国の政策が、政権交代と共に劇的に変わる事態が現実化する中、こうした点も踏まえてエネルギーの長期的な未来像をどう描いていくべきなのか、が問われているのである。これは容易ならざる問題であり、完璧な答えを出すことは誰にとっても難しい。一つは、目の前で激しく展開する事象そのものだけに注意するのではなく、その事象を発生させている構造的な背景要因に対する総合的・俯瞰的理解を深め、その理解を長期的な未来像を描く際に十全に活用するということが重要だろう。また、その一環として、いわゆる「シナリオプランニング」的な手法を活用することも有意義なのではないか。

理想と現実のギャップ拡大は、今日のエネルギー問題への対策を検討する上で、世界共通の重要課題となっている。2020 年以降、世界的に急速に加速したカーボンニュートラルの潮流は大きな影響力を持って世界のエネルギー政策を動かしてきた。世界の気温上昇を 1.5℃以内に抑えるための野心的な目標実現のため、様々な取り組みが実施・検討されているが、ウクライナ危機以降の国際エネルギー情勢の不安定化、エネルギーコスト上昇に対する社会の脆弱性の高まり、世界の分断の深刻化による経済・エネルギー安全保障問題への影響などの現実の下で、各国のエネルギー政策には様々な揺らぎ・変化が見られている。しかし、こうした難しい時期であるからこそ、長期的なエネルギーの未来像を描く見直し・シナリオが求められ、重要な役割が期待されることになる。

期待される役割を果たすためには、足下で起きている現実的な変化を踏まえて、見通しのための前提条件を精査し、適切に調整し、分析に反映させていくことが重要になる。また、シナリオそのものを見直し、必要に応じて新たな、あるいはより適切な将来シナリオを用意することも重要である。今回の IEA による CPS の復活もその一環として見ることもできよう。また、理想と現実の双方ともに重要という観点からは、分析手法として、現状を踏まえつつ様々な前提条件を置いて将来を分析する「フォアキャスト型」見通しも、将来の着地点を先に決めてそこに行きつくための道筋を示す「バックキャスト型」分析も、共に有効活用することが重要になる。もちろん、その際には、この 2 つの手法の違いと特徴を十分に理解して使いこなすことが不可欠となる。

今回の意見交換では、米国 LNG 供給大幅拡大による LNG 市場への影響、変動型再生可能エネルギーに関する統合分析の詳細内容など、より具体的な質問や問題意識にも様々な触れることができた。こうした「生きた問題意識」を適切に取り込み、弊所のアウトルックをさらに磨き上げていくことが重要である点を確認できたことは極めて有意義であった。

以上